

# 六篠会報

No.19

発行／神戸市灘区六甲台町1 神戸大学農学部内 <sup>りく</sup>六 <sup>そう</sup>篠 <sup>かい</sup>会 (神戸大学農学部同窓会)  
連絡用FAX : 078-881-2752 E-mail : rikusou@ans.kobe-u.ac.jp



篠山城跡からの眺望 (南東方向、高城山、弥十郎ヶ岳)

## CONTENTS

「会長挨拶」 北浦 義久 .....	2	六篠会からのお知らせ	
「学部長挨拶」 眞山 滋志 .....	2	六篠会会員の連携と親睦を深めよう！ 中村 直彦 .....	7
同窓生は今 ①古川 潤 .....	3	研究室紹介 ①応用動物学科動物機能調節学講座 栄養生化学教育研究分野 上曾山 博 .....	7
②谷 五郎 .....	3	②植物資源学科資源植物学講座 植物育種学教育研究分野 石井 尊生 .....	7
③雨宮 良幹 .....	4	③生物環境制御学科植物機能制御学講座 熱帯植物学研究分野 東 哲司 .....	8
最新研究情報		④生物機能化学科生物機能利用化学講座 動物資源利用化学教育研究分野 岡山 高秀 .....	8
牛肉の品種識別 万年 英之・辻 荘一 .....	4	⑤食料生産環境工学科地域環境工学講座 土地環境学研究分野 河端 俊典 .....	9
代議員総会報告 代議員総会を開催 中村 直彦 .....	5	庶務報告 .....	10
支部会だより ①KOBEL六篠会 新元 美香 .....	5	15年度決算 .....	10
②県六篠会 相野 公孝 .....	6	16年度予算 .....	10
③関東支部 和泉 孔庸 .....	6	六篠会活動への連絡先 .....	10
④東海支部 上田 洋 .....	6	同窓会事務局の案内 .....	10
⑤延喜会 新家 龍 .....	6	編集後記 .....	10

# 六條会活動を振り返って

六條会会長 北浦 義久



六條会員の皆さんお元気で、それぞれ各分野において、ご活躍のことと心からお慶び申し上げます。

今年の夏は猛暑が続いたうえに、秋にかけて台風が本土に10個も上陸、加えて新潟県中越地方での地震の発生と、異常な状況が続き、私たちの生活に大きな影響を及ぼしました。

とりわけ台風23号は、大宇所在の兵庫県にも大きな爪痕を残しました。農業の面でも、収穫前のレタスを始め、多くの農畜産物が被害を受けるとともに、山林の崩壊、ため池の決壊、さらに、農地の流出や埋没など各地で被害を被りました。

この度の災害を振り返って、過疎化や高齢化が進む農山村において、山林やため池、農地の管理がおろそかになり、被害を大きくした側面も窺えます。改めて

積極的に参加し、他学部との交流を図っていくよう心がけていますが、会員の方々の参加が少なく、残念に思っています。これから、多くの会員の皆さんにもどんどん参加していただき、他学部の同窓生の皆さんとの交流を深めて頂けたらと願っています。

母校、神戸大学も国立大学の法人化に伴って大きく変わります。我々同窓生としても、大学をどのように支えていくのか、これからの大きな課題でもあります。真山農学部長を始め、農学部の先生方とも意見を交わし、六條会としても、支援の輪を広げて行きたいと考えております。

また、大学の方でも、行政や産業界さらに地域との関係を密接にしたいと、大学で研究された成果が、現場に役立つ技術として、活用されればと期待しているところがあります。そして、我々卒業生だけでなく、多くの国民の皆さんにも理解され、愛される神戸大学として、これからも着実な歩みをつけてほしいものと念願しています。

最後にになりましたが、来年5月には、4年に一度開催する六條会の総会を予定しております。詳しい日程が決まれば連絡しますので、是非ご参加下さい。会員の皆さんのご健勝とご多幸、そして一層のご活躍をご祈念申し上げます。また、大学の方でも、行

六條会会員の皆様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。さて、本年度の六條会報の発行に寄せて、ご挨拶を神戸大学と農学部の近況をお知らせいたします。各位にはすでにご承知のように本学は本年4月から法人化され国立大学法人神戸大学となりました。我が国の国立大学制度が歴史の変革を遂げた訳ですが、従来にも増して高等教育研究機関としての使命達成に向けた努力が求められる中、教職員一同農学部の発展を期して微力ながらも努力しておりますので、各位の変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

さて、神戸大学は、昨年10月に神戸商船大学が海事科学部となつて統合いたしましたので、11学部（文学、国際文化、発達科学、法学、経済学、経営学、理学、医学、工学、農学、海事科学）となり、学部数は国立大学法人では12番目に、学部の入学生定員数は2,590名で東大、京大に次いで3番目に多い大学となりました。農学部の大学院は理学部、工学部、海事科学部と共に大学院自然科学研究科として組織され、生命科学、食料科学並びに環境科学の分野の主要な構成を担っています。農学部とその他の大学院には応用動物学、植物資源学、生物環境制御学、生

物機能化学科、食料生産環境工学科の5学科及び5専攻がそれぞれあります。現在農学部の学部学生は、695名（内女子294名）、博士前期課程（修士課程）には265名（内女子101名）、同後期課程には100名（内女子29名）の学生が学んでいます。留学生は総勢61名博士31名、修士27名、学部3名）です。学部の入学生定員150名に加えて3年生からの編入生定員が20名あります。

これからは、各国公立私立大学及び学部のブランド力がますます問われることになりまます。神大農学部が如何に魅力あるブランド力の高い学府を構築するか、極めて重要な時期にあると思っております。学部集う教職員にはこれらに対する備えに怠りがないように、先に定めた中期目標中期計画に沿って、教育力、研究力、就職力、社会貢献・国際貢献力、及びこれらを支える資金力向上を図る具体的な活動が求められ、大学評価機構による目標・計画の実行状況についての検証評価を定期的に受けることになっていきます。また、国からの運営費交付金が毎年微減する状況でありますので財政事情はかなりの厳しい状況であり、平成14年度から教職員の専門職能力の向上を図るための研修会などを開催しています。今後個々のブランド力形成に向けた努力を重ねたいと思っております。

# 法人化後の農学部近況報告

農学部長 眞山 滋志



すが、此処では社会貢献と国際貢献に関するさまざまな計画事例を紹介致します。ブランド力形成の一つは、神戸大学農学部産「神戸ビーフ」の産出であります。ご承知とは思いますが、神戸ビーフをはじめ松阪牛、近江牛などの遺伝子源は本県但馬地方の良質の黒毛和種牛であります。このブランド品を神大農学部産とする企画実行に当たり、加西市にある附属農場「食資源教育研究センター」に新たに牛舎を増設し、恒常的に農学部産「神戸ビーフ」の生産を計ることになりました。何時日か同窓生の皆様にもご利用いただけるようになればと期待しています。食資源生物の生産だけが目標ではありませんが、美味しいものを育種して食卓に届けることは農学部が担う極めて魅力ある分野であり、ブランド力の一つと考えています。

一方、農学部における国際的視野に富む素養を育む環境も整えたいと思っております。農学部は多くの外国の大学と学術交流協定を結んでおりますが、とくに北東アジアの隣国4カ国における中国農業大学（旧北京農業大学）、国立ソウル大学、ベトナムノンラム大学（旧サイゴン市のホーチミン農林大学）、国立フィリピン大学ロスバニオス校とは定期的に相互交流を図ることとしています。とくにベトナムのノンラム大学には

学術交流拠点を形成して、熱帯農業実習コースを開講するなどして学生が熱帯動植物について現地で具体的に学べる機会を設ける予定です。また、フィリピン大学ロスバニオス校とは英語による授業の開講などで交流を深めたいと考えています。

この他、就職力、外部資金獲得力などが問われることになりませんが、これには同窓会をはじめ在学生の父兄会、産官民機関並びに市民の皆様からの支持の形成力即ち「農学部ファミリー力」なるものが重要であると思っております。とくに、学生諸君への就職支援を設ける予定ですがこのサービスには同窓会各位のネットワークのご支援をいただければ大変ありがたいと思っております。法人化後半年を経た今、改めて現在及び過去の農学部集う人々のファミリー力が農学部と神戸大学のブランド力形成にとって極めて重要になると再認識している次第です。最後に、昨年お知らせしました学舎改修につきましては、今一層その実現に向け努力中であることを申し上げて近況報告とさせていただきます。皆様には今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。



間違ひ。ああ、そうですか」  
3日後だった。「一刻も早く他社を探して下さい」のはがきが届いていた。そして、先生がくださった資料には「大麦によるα、βアミラーゼの測定」と確かに書いてあった

これはあくまで実験の練習のための資料だったのである。

農協職員からタレントへ  
春4月。新入生や新入社員で街は活気にあふれている、ハズだった。でも、この年の就職は厳しかった。オイルショックの影響をモロに受けていた。僕もその影響、いや、僕は自分の責任をモロに受けて、仕事が決まっていなかった。

そんな4月の中頃。親父が言った。  
「農協って、知ってるか？」  
もちろん知らなかった。  
「まあ、試験だけでも受けてみようや」  
という誘いで、受けた。試験の後、いきなり組合長の面接があり、びびった。ここで面接も忘れられない。

「ほう、神戸大学卒か。それなら、ジャガイモの植え方、知ってるか」  
それは、習ってないって。でも、もう失敗は許されない。「ええーっと、そんなの、みんな知ってますよねえ」とか何とか時間かせぎをしていると、  
「そんなもの、芽を残して植えたらいいんやろ」  
と、組合長自らが答えていた。助かった！翌日から採用された。

それから15年。思わぬ転職のお話を、ラジオ関西のディレクターからいただいた。悩

みに悩み抜いて転職を決めたのは、子供3人、妻1人(悔しいけど)、の37歳の年末だった。そして、翌年の4月から、な、なんと、農協職員からタレントに変身したのである！

ラジオの世界へ、きてちょうだい！

今、ラジオでしゃべることの難しさと、面白さに、どっぷりと漬かっている。今年で14年目を迎えている。まあ、よく続いたもんだである。

月曜から木曜までは毎朝3時半起き。朝から新聞チェックに余念がない。放送は7時半から11時までの生放送。番組は「谷五郎のOH!ハッピーモーニング」(ラジオ関西58.8KHZ)。みなさん、聞いてね。

土曜は岡山の山陽放送(149.4KHZ)で「谷五郎の旅はつづくよ...」。こちらは朝9時半から2時までの4時間半の生放送だ。毎週幹線を通じている。  
ラジオって面白いですよ。



千葉大学園芸学部 教授 雨宮 良幹 (神P11回)

神戸大学農学部第1回生として1970年に卒業しました。当時は植物防疫学科に所属し、6名の同級生とともに植物病理学研究室で学びました。4年生になった頃に大学紛争が激しくなると農

耳からだけの情報だけど、人間の想像力を刺激してくれる。いや、我々しゃべり手が刺激をしないといけないんだけど。その世界は深く、魅力的だ。自分に一番合っていると思う。そんな仕事に出会えて、本当にシアワセだ。

そうそう、僕の農学部の恩師、新家龍先生にもゲストでお越しいただいた。うれしかった。もちろん、あの、資料をくださった先生である。ラジオでは焼酎についての話だったんだけど、

「この話は大学でもやったはずですがねえ谷君」  
スマセン、先生、僕、大学では無能学部で、専攻は農芸化学じゃなくて、芸能学だったんです。

そして、大学時代から始めた音楽IIブルグラスは今も続けており、卒業後に組んだコミック・ブルグラス・バンド「ゴロシヨ」は、今年結成29年目に入った。神戸を中心にライブ活動している。こちらもぜひ一度、聴きにきて下さい。笑えるよお！

学部では10か月に及ぶストライキが決定され、卒業が4月にずれ込むという異例の事態となりました。幸い講義や実験などの必要な単位はそれぞれにほとんど取得してしましたので留年は免れましたが、過激派学生のプレッシャーにストレスを感じつつ卒業研究に取り組んでいたことが思い出されます。教養課程ではポート部での激しい練習と試合に明け暮れていましたが、専

門課程に上がって研究室に所属してからは宮本雄一教授をはじめ兵庫農科大学最後の先輩方の指導を受けて研究生活の面白さに惹かれるようになり。4年間を振り返ってみると、環境に恵まれたキャンパスでスポーツと勉学に励み、良き教官や仲間と出会えたことなど、充実した大学生活を過ごせたことに大変満足しています。

卒業後は東北大学大学院に進学し、修士および博士課程を修了して、1977年から千葉大学園芸学部植物病理学研究室に勤務することになりました。大学および大学院時代はウイルスに対する植物の抵抗性に関する研究に取り組んでいました。千葉大学に着任してからは当研究室が主要課題としていた土壌病害に関する研究にも携わることになり、研究室を任せられてから

もその伝統を引き継いで今日に至っています。土壌病害は連作障害の主原因とされており、こちらもぜひ一度、聴きにきて下さい。笑えるよお！

さて、我々の研究室では、主として土壌病原菌類の病原性メカニズムの解明やDNAによる診断技術の開発、微生物を利用した病害防除技術の開発などを目的とした研究を行っています。私が中心となって担当している「微生物を利用した病害防除法」は生物防除(バイオコン

トロール)と呼ばれる、病原菌の活動を抑制する機能を持った微生物を利用して病害を防除する方法です。この方法は古くから多くの研究者によって試みられてきましたが、安定し

いたところがありました。現場を見据えた研究の重要性を意識するようになったのは千葉大学に赴任してからはなにかと思います。これには、取り組んだ研究課題や農業の実際に触れる機会が増えたことが影響していますが、それにも増して、神戸大学在学中に聴いた鈴木直治先生の講義の影響を強く受けていたように思います。先生は私が4年生になった時に農業学研究室の教授として農水省から転任されてこられました。講義だけでなく学生との雑談の中でも、農業の現場で生じた諸問題とそれに対処した経験談などを随所に盛り込んだり研究意欲を掻き立てられるような話をされたりして、大変新鮮な感じを抱きながら興味深く聴いていたことが思い出されます。現在、私も同じような立場で学生の指導に携わっていますが、知的好奇心をくすぐるような鈴木先生の教育方法が大変参考になっています。

そのきつかけの一つとなつたのは、4年前に中国の新疆ウイグル自治区に広がるワタの栽培地を訪れたことにあります。当地は天山山脈の北方に位置し、中国におけるワタの最大生産地ですが、そこでも長年にわたる連作によって立枯病など土壌病害の発生が随所で見られ、激発地では奥行き1kmにも及ぶ圃場のワタがほとんど枯死状態という有様でした。日本では多くの場合土壌蒸気による消毒が施されていますが、このような広大な土地ではそれもままならず、有機質の少ない土壌という点もあって、土壌改良の必要性を強く感じた次第です。以来、当地の研究を提

点にして有機栽培試験を始めることになりました。有機物の植物生育や病害抑制に及ぼす効果のメカニズムについては、用いる有機物の種類や量、施用後の微生物の動向や機能などを詳細に調査することに

よって様々なヒントが得られますので、その成果を土壌管理技術に応用できれば、今後の発展を楽しみにしながら学生たちと共に頑張っているところです。

最新研究情報

牛肉の品種識別

応用動物学科学遺伝生化学研究分野

助教授 万年 英之(神Z20回)  
教授 辻 莊一(兵Z12回)



ここ数年の間、農産物の品種や産地などがニュースを賑わしていることは皆さんもご存知のことかと思えます。我々の研究室では、この問題に対処すべく、牛肉の偽装表示を見抜く技術の開発を行ってきています。正しく表示された牛肉の販売は、消費者や生産者の受益といった点で重要だと我々は考えています。

我々が取り組んだのは、国内産牛肉の中でも交雑牛(黒毛和種×ホルスタイン種)が黒毛和種として偽装販売されることについてです。1991年の牛肉自由化以前、ホルスタインの雄は乳生産に携わらないことから、去勢されて安価な大衆牛肉として好まれてきました。ところが牛肉の自由化以降、安価な輸入牛が入ってきたためにホルスタインの牛肉は輸入牛肉に価格の

面から対抗することが難しくなってきました。しかし、酪農家にとっては牛乳を生産するために母牛に子供を産ませなければなりません。そこで考えられたのが、ホルスタインの母牛に黒毛和種の精液をつけ、交雑牛を生産することでした。この交雑牛は、肉質も黒毛和種とホルスタイン種の中間に位置し、肉質の良いものは黒毛和種と見ただけでは区別が付きにくいと言った点があります。よって、ホルスタイン種より高価格で取引されます。しかし、毛色や肉質が黒毛和種と見分けが付きにくいものが存在することから、交雑牛の飼育頭数が多くなるにつれ、この交雑牛肉が高級黒毛和種牛肉にしばしば偽称表示されているようです。



# 県六條会近況報告

相野 公孝 (神P12回)

# 関東支部の近況について

支部長 和泉 孔庸 (兵C8回)

# 東海支部

支部長 上田 洋 (兵C6回)

# 今こそ延喜会の重要性を思う

顧問 新家 龍 (兵C5回)

県六條会総会を、去る10月

16日に明石グリーンホテルで開催しました。神戸大学農学部長の眞山滋志先生、本部からは北浦義久会長が御出席いただき、和やかな雰囲気の中、総会が無事終了致しました。

眞山先生からは、国立大学法人となった神戸大学の近況を、北浦会長からは、本部のこれからの取り組みをお話し頂きました。総会に引き続き行われた懇親会では、昔話や職場の話など、楽しい時間を過ごすことができ、アツと言う間に時間が過ぎ去っていました。

「県六條会」は兵庫県に勤務する(又、勤務した)六條会会員により、昭和56年に結成され、現在、会員210名(内現職会員159名、OB会員51名)を数え、その勤務先は、農林水産部のほか、企画管理部、県民政策部、健康生活部、産業労働部、県土整備部等と多岐にわたっています。本会の活動は年一回の総会兼懇親会と名簿発行ですが、会員同士は、仕事の中で同窓生としての良き連携と緊張のもと、困難な仕事にも前向きに取り組んでいます。



関東支部は去る9月3日(金)に東京丸ノ内の「神戸KUCクラブ」で支部総会を開催し、約40名の会員並びに本部からは農学部の辻辻一教授(兵12)に出席をいただきました。今回の総会を平日の夕刻から開催したのは、関東地区の地理的な事情を考慮して、会員各位が勤務を終えて参加していただく方が都合がよいのではと考えてのことです。

支部役員改選を行い、下記の役員を選出して今後の関東支部並びに神戸大学のOBで組織する神戸大学東京連絡会の運営に携わることとしました。

支部長 多田 泊二(兵13) 副支部長 岸谷 靖雄(兵10) 山本 隆司(兵10) 長岡 俊明(兵10) 本田 勉(兵12) 八尾 明良(神1) 上山 維介(神3) 兼神戸大学東京連絡会「六條会」代表・鮫島 常樹(神6) 東野 純明(神13) 兼神戸大学東京連絡会「六條会」代表・早瀬 基(神19) 幹事 水田 勲(兵12) 田中 易(神12) 川口 真二(神18) 監事 河波 朗(神14) 荒井 良昌(神15) 村橋 一彦(神16)

総会後の懇親会では辻教授から神戸大学並びに農学部及び六條会の現状について報告をしていただき、保田 茂氏(兵10)前神戸大学教授からは「日本の有機農業の現状」と題した講演をしていただきました。有機農業の生産、表示、流通等の現状と共に環境と安全に配慮した農産物の消費者への提供の実態等について具体的にお話がありました。「森林のように多品種の共生」を目指して田畑で有機農法により農産物を育てることが究極の目的であるときれ、当日の出席者には大いに印象深く意義のある講演でした。

当日の総会会場である「神戸大学KUCクラブ」では、他学部のOB諸氏が頻りに合持をもち、六條会もメンバーであり、都心で地理的にも便利な場所です。時には立ち寄って学生時代を想起して、母校に六條会に関心をもっていただきたいものと願っています。また、今年からクラブ内に情報の交流の場として「神戸大学東京オフィス」が開設され、職員が常駐されており、校の思い出を語る場として活用していただければ願っています。

今年度の東海支部総会は10月23日、名古屋市のホテルグーデンパレスで開催した。遠くは富山県からも駆けつけていただき、お陰様で大盛況であった。

平成13年の秋に東海支部を立ち上げ、半田市で第1回の総会を開いてからもう4回目の会合である。この間、多くの方々のご協力を得て年々充実した会になってきたが、今年は一つの節目と位置づけ、新しい企画として土田廣信氏(36年農製、現・愛知みずほ大学大学院教授)に講演をお願いした。演題は「茸多糖の免疫活性」であったが、話題性もあって大好評であった。

ところで、現在、東海支部の名簿に登録されている同窓生は約160名であるが、今年2月に開催した役員会で「今後、東海支部をますます発展させるには登録者の約7割を占める神大卒業生にもっと参加してもらわなければならない」ということが提起された。神大卒業生との接点が多い土田廣信氏と小原章裕氏(59年院・食化、現・名城大学農学部助教授)の両氏に幹事就任をお願いしたところ、両氏から「東海支部を発展させることで



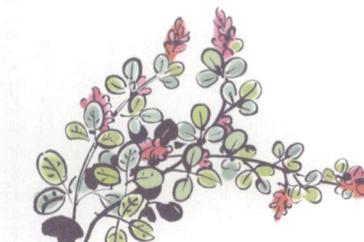
延喜会の歴史は、古く兵庫農科大学農芸化学科の発酵生産学研究室の時代に遡る。当時研究室は教授麦林権太郎先生、助教西羅 寛先生、新家 龍先生の教官組織であった。昭和30年代前半に清酒業界勤務の卒業生の世話によってスタートした会は、最初「麦西会」と呼ばれていた。しかし、麦林先生のご提案で平安時代の発酵の歴史の公文書に掲載されている「延喜式」に因んで「延喜会」と改名され、大きくその門戸を開き発展することとなった。

したがって、延喜会の会員は最初発酵生産学研究室の卒業生が中心であったが、清酒のみに限定せず広くアルコール発酵、酢酸発酵、アミノ酸発酵など多くの発酵分野で活躍する卒業生が増加し、各分野の会員でしめられるようになった。

昭和40年代に入り、兵庫農科大学が国立神戸大学農学部に移管される頃には、灘の酒造メーカーを中心に1000名近い卒業生が活躍する状態になった。勿論、関西のみに止まらず全国的にその活躍場所を広げていったのである。現在、既に停年で退職した卒業生もあるが、有名酒造会社や関連会社で重役や部長職についてその重責を果たしている卒業生が多い。



一方、神戸大学では「日本酒研究会」の設立総会が昭和62年5月16日に農学部C101教室に多数の参加者(学生、教官及び事務官)を集めて行



# 六 條 会 からの お知らせ

## 六 條 会 会 員 の 連 携 と 親 睦 を 深 め よ う !

...05年5月に総会を開催...

代表理事 中村 直彦 (神ノ一回)

「農産物は外国から輸入すればよい。日本の農業がなくなれば、なぜ困るのか」

と、東京で行ったフォーラムで、一人の大学生がパネリストに質問した、という。確かに、日本の農業の国内総生産に占める割合は、終戦直後の1946年は27%を占めていたが、いまや1%に過ぎない。このような考え方は、世間一般の傾向として広がりがつつある。

### 「食料自給率を目標の45%にするのは困難」

と、農水省は、食料・農業・農村基本計画の見直し作業で、2010年度までの目標達成年度を5年先送りした。1960年に79%あった食料自給率が、いまや40%と先進国中最低水準に低下しており、さらに目標を掲げたものの数値は後退している。

### 「230万haの農地が消滅、担い手農業者が45%減少」

農水省の統計資料では、1961年の日本の耕地面積は609万haであったが、公共事業で農地が100万ha増えたものの、2003年には474万haとなり、宅地、工業用地、耕作放棄地などにより約230万haが消滅した。また、農業所得への依存度の高い主業農家は、1990年に



# 研究 室 紹 介

## ■ 応 用 動 物 学 科 動 物 機 能 調 節 学 講 座 栄 養 生 化 学 教 育 研 究 分 野

助教 上 曾 山 博

82万戸あったが、2003年には45%減少し45万戸となっている。

以上、農業の抱えている課題を一部列記した。現にどの地域においても農業者の高齢化は一層進み、後継者は不足し、遊休農地は増加している。さて、農業を学ぶ者として、このような状況をどう考えるのか？ 農業の構造改革と意識の改革がいま必要である。

6、000余名の農学部卒業生は、日々いろいろな課題に直面し、それに挑戦している。同窓生が連携することにより、これら課題の解決策は必ず見つかるであろう。

来年5月7日に、4年に一度開催する六條会の総会を予定している。総会の後は懇親会を企画するなど楽しい一日としたいと思っている。直前には詳しい日程を連絡しますので、ぜひ参加されることを期待しています。

平成11年の学部改組に伴い、畜産学科・家畜飼養学講座から応用動物学・動物機能調節学大講座・栄養生化学教育研究分野へと衣替えし、現在、長谷川信教授に加え、香川大学からの上曾山博助教(平成12年12月着任)と、伊藤ハム株式会社からの本田和久助手(平成13年5月着任)の3名で研究室を運営しています。又、学生は、大学院博士前期課程9名、学部4年生4名が在籍しており、特に最近では、博士課程進学者の増加に加えて、他大学からの入学者も多く、研究室の活性化に繋がっています。本教育研究分野における教育として

は、学部授業4科目(基礎生化学、栄養生化学、栄養資源学及び栄養代謝調節学)、大学院前期課程授業2科目(栄養生化学特論I及び栄養生化学特論II)、大学院後期課程授業2科目(栄養代謝機構学及び動物代謝制御論)の他に、実験、実習、演習等を担当しています。

ところで、動物は体の仕組みを保持し円滑に機能させるために、外界から食物(栄養素)を摂取し、これを消化・吸収することにより体内に取り入れて、利用し、或いは様々な化合物に変化させています。これが、最終的に動物の成長、維持、活動及び繁殖に繋がっています。この様な動物体内での化学変化を利用し、生産された畜産物(乳、肉、卵等)は、そのまま、或いは様々な加工食品の原料として利用されており、畜産物無しには現在の食生活を営めない程、我々の生活に深く根付いています。しかし、この様な畜産物の生産の為に用いられている家畜用の飼料の原料は、その殆んどを輸入に依存し、自給率は非常に低くなっています。

そこで、本教育研究分野における研究としては、効率的な動物生産を目指して、栄養素の供給源である種々の食物について、栄養価やその特性に基づく最適な活用方法を検討したり、又、動物の体の仕組みについて栄養素の利用を中心に調べたり、更に、これら栄養素の利用や化学変化を調節する機構をミクロ(遺伝子、細胞等)からマクロ(個体のレベルに至るまでの広範囲に渡って解き明かそうとしています。そして、この様にして得られた知識を基に、体の仕組みをこれまで以上に合理的に保持し機能させ得る新しい栄養素材を開発したり、又、安全性に配慮しつつ分子生物学的手法を取り入れて、体の仕組みそれぞれをより効率

維持、活動及び繁殖に繋がっています。この様な動物体内での化学変化を利用し、生産された畜産物(乳、肉、卵等)は、そのまま、或いは様々な加工食品の原料として利用されており、畜産物無しには現在の食生活を営めない程、我々の生活に深く根付いています。しかし、この様な畜産物の生産の為に用いられている家畜用の飼料の原料は、その殆んどを輸入に依存し、自給率は非常に低くなっています。

そこで、本教育研究分野における研究としては、効率的な動物生産を目指して、栄養素の供給源である種々の食物について、栄養価やその特性に基づく最適な活用方法を検討したり、又、動物の体の仕組みについて栄養素の利用を中心に調べたり、更に、これら栄養素の利用や化学変化を調節する機構をミクロ(遺伝子、細胞等)からマクロ(個体のレベルに至るまでの広範囲に渡って解き明かそうとしています。そして、この様にして得られた知識を基に、体の仕組みをこれまで以上に合理的に保持し機能させ得る新しい栄養素材を開発したり、又、安全性に配慮しつつ分子生物学的手法を取り入れて、体の仕組みそれぞれをより効率

脂質やコレステロールの含有量のみを低下させた、より高品質の畜産物の生産を試みています。又、家畜のより効率的な生産の為に、成長を促進させることが不可欠であることから、特に肉用家畜は、摂食量を増やして成長を早めるよう改良されて来ています。そこで、栄養学的な観点から、摂食を司る脳の視床下部における摂食調節機構を、種々の視床下部神経核における神経ペプチドとその受容体の発現量の相違や、種々のペプチドの脳内投与による摂食量変化等を調べることによって解明し、それを高度に利用することによる、生産性の向上を目指しています。

発等の研究をしています。三十尾助教は、コムギの未熟胚からのカルス誘導の最適条件の模索、アズキのプロトプラスト培養系やメロンの薬培養系の確立に関する研究を主に、組織培養の育種への利用をめざしています。私、石井尊生は野生イネ由来の有用量の形質の同定およびそれらの栽培品種への導入、またイネの栽培化に関する遺伝子群の解明に関する研究を行っています。本年度の研究室の学生は、博士課程2名、修士課程7名、学部4年生6名の計15名です。彼らは各教官にはほぼ均等に分かれて研究指導を受けています。育種学研究室の教官・学生は、室内で研究をするだけではなく、野外やガラス室で植物材料を育てています。よく言えば土や植物に親しむ、悪く言えば泥と土まみれのグループです。特に、メンバーの約3分の2がイネを材料とした研究をしていますので、ここでは農学部学舎の南西に位置している田んぼで、私たちが行っている作業について紹介したいと思います。

4月・生い茂った雑草を刈り取り、耕耘機で土を起こします。  
5月・実験材料の種子の整理をし、シャーレ等に浸漬します。催芽後、シードリングケースに植えつけます。  
6月・どろんこになりながらの代かき(田んぼ作り)。数日後、総出で田植えをします(写真)。  
7月・水量調節、雑草引き、農業散布などを行い、田んぼの管理をします。  
8月・イネの出穂が始まる中旬頃に網をはります。9月・出穂期などの形質調査をします。10月・稈長、穂長、分けつ数などを記録しながら稲刈りをします。11月・実験に関係なく干したイネについては乾燥・脱穀・精米をして、いつでも食べることのできる状態にします。文字にしてしまいますと、田んぼでの作業は淡々と行われているように思えるのですが、実は田んぼでは困ったことがたくさん起こっています。そこで次に、田んぼにやってくる困った訪問者達について紹介しようと思います。イネミズゾウムシ・5-6月にかけて、イネの苗の柔らかい葉をかじる体長5ミリ程度の甲虫。小さいとはいえず、歩く、泳ぐ、飛ぶの3拍子そろった、陸海空を自由自在に動き回る実に手強い相手です。近くの雑草から続々とやってくるため、農業はあまり効きません。ウンカ・シヨウジョウバエサイズの蟬と言ったらよいのでしょうか。風に乘って7月頃より中国大陸からやってきます。知らないうちにイネに茎にへばりつき、しばらくすると幼虫が大量発生します。「ウンカのごとく」という言葉の意味が十分すぎるぐらい理解できず、マイチユウ・ニカメイガが飛来してきてイネの茎に卵を産み付けます。ふ化した幼虫(マイチユウ)は茎の中に入り、ずい部分を食べ荒らします。

植物育種学教育研究分野のスタッフは、上高信志教授、三十尾修司助教、そして私の3人です。上高教授は、酒米の酒造好適形質の1つであ

## 植 物 資 源 学 科 資 源 植 物 学 講 座 植 物 育 種 学 教 育 研 究 分 野

助教 石 井 尊 生

植物育種学教育研究分野のスタッフは、上高信志教授、三十尾修司助教、そして私の3人です。上高教授は、酒米の酒造好適形質の1つであ

脂質やコレステロールの含有量のみを低下させた、より高品質の畜産物の生産を試みています。又、家畜のより効率的な生産の為に、成長を促進させることが不可欠であることから、特に肉用家畜は、摂食量を増やして成長を早めるよう改良されて来ています。そこで、栄養学的な観点から、摂食を司る脳の視床下部における摂食調節機構を、種々の視床下部神経核における神経ペプチドとその受容体の発現量の相違や、種々のペプチドの脳内投与による摂食量変化等を調べることによって解明し、それを高度に利用することによる、生産性の向上を目指しています。

4月・生い茂った雑草を刈り取り、耕耘機で土を起こします。  
5月・実験材料の種子の整理をし、シャーレ等に浸漬します。催芽後、シードリングケースに植えつけます。  
6月・どろんこになりながらの代かき(田んぼ作り)。数日後、総出で田植えをします(写真)。  
7月・水量調節、雑草引き、農業散布などを行い、田んぼの管理をします。  
8月・イネの出穂が始まる中旬頃に網をはります。9月・出穂期などの形質調査をします。10月・稈長、穂長、分けつ数などを記録しながら稲刈りをします。11月・実験に関係なく干したイネについては乾燥・脱穀・精米をして、いつでも食べることのできる状態にします。文字にしてしまいますと、田んぼでの作業は淡々と行われているように思えるのですが、実は田んぼでは困ったことがたくさん起こっています。そこで次に、田んぼにやってくる困った訪問者達について紹介しようと思います。イネミズゾウムシ・5-6月にかけて、イネの苗の柔らかい葉をかじる体長5ミリ程度の甲虫。小さいとはいえず、歩く、泳ぐ、飛ぶの3拍子そろった、陸海空を自由自在に動き回る実に手強い相手です。近くの雑草から続々とやってくるため、農業はあまり効きません。ウンカ・シヨウジョウバエサイズの蟬と言ったらよいのでしょうか。風に乘って7月頃より中国大陸からやってきます。知らないうちにイネに茎にへばりつき、しばらくすると幼虫が大量発生します。「ウンカのごとく」という言葉の意味が十分すぎるぐらい理解できず、マイチユウ・ニカメイガが飛来してきてイネの茎に卵を産み付けます。ふ化した幼虫(マイチユウ)は茎の中に入り、ずい部分を食べ荒らします。

脂質やコレステロールの含有量のみを低下させた、より高品質の畜産物の生産を試みています。又、家畜のより効率的な生産の為に、成長を促進させることが不可欠であることから、特に肉用家畜は、摂食量を増やして成長を早めるよう改良されて来ています。そこで、栄養学的な観点から、摂食を司る脳の視床下部における摂食調節機構を、種々の視床下部神経核における神経ペプチドとその受容体の発現量の相違や、種々のペプチドの脳内投与による摂食量変化等を調べることによって解明し、それを高度に利用することによる、生産性の向上を目指しています。

脂質やコレステロールの含有量のみを低下させた、より高品質の畜産物の生産を試みています。又、家畜のより効率的な生産の為に、成長を促進させることが不可欠であることから、特に肉用家畜は、摂食量を増やして成長を早めるよう改良されて来ています。そこで、栄養学的な観点から、摂食を司る脳の視床下部における摂食調節機構を、種々の視床下部神経核における神経ペプチドとその受容体の発現量の相違や、種々のペプチドの脳内投与による摂食量変化等を調べることによって解明し、それを高度に利用することによる、生産性の向上を目指しています。

脂質やコレステロールの含有量のみを低下させた、より高品質の畜産物の生産を試みています。又、家畜のより効率的な生産の為に、成長を促進させることが不可欠であることから、特に肉用家畜は、摂食量を増やして成長を早めるよう改良されて来ています。そこで、栄養学的な観点から、摂食を司る脳の視床下部における摂食調節機構を、種々の視床下部神経核における神経ペプチドとその受容体の発現量の相違や、種々のペプチドの脳内投与による摂食量変化等を調べることによって解明し、それを高度に利用することによる、生産性の向上を目指しています。

被害にあったイネは、分けつごと白くなって枯れていきます。よく、「メイチュウが命申した」などと冗談をとばしたりしますが、心中は穏やかではありません。

近所の子供：田んぼにはたくさんのおタマジヤクシが発生します。それを目当てにやってきます。まわりには田んぼなど一切無いためか、彼らにとってはおタマジヤクシが大変珍しいようです。目を生き生きさせて、「すっけー、オタマジヤクシだー」と言っている子供達を見ると、ついつい怒ることを忘れて、「採ってもかまへんけど、田んぼに入ったらあかんで。また、絶

対イネやラベルにはさわらんといてね。」と不法侵入を許可してしまう始末です。

スズメ・若いイネの種子は大好物なようです。登熟期より登場するため、毎年イネの出穂が始まる頃に、田んぼを細かい目の網でおおいます。しかし、相手もさるもの。たくさんの方達を引き連れ、網の上に降り立ち、全員の体重で網を押し下げて、背の高いイネの種子を食いあさります。

イノシシ・隣接している畑では土を掘り起こしたりして毎年大暴れをしています。幸いなことに、田んぼは高い金網で囲まれているので被害にあ

ません。ただ、まれに間抜けな学生が入り口の戸を閉め忘れたりすると中に入ります。そうなること、イネはなぎ倒されるわ、田んぼにイノシシ大の形をした水たまりがあるところにできるわの大打撃を受けます。

台風・どうすることもできません。ひたすら来ないこと、早く過ぎ去ることを祈るのみです。

以上のように田んぼでは様々なことが起こっています。そして、植物を野外で育てることの難しさを痛感しながら、毎年学生達と力を合わせて何とか切り抜けていま

す。ここでは田んぼの中心を紹介しましたが、もちろん田んぼ以外にもガラス室などでポットや鉢を使って実験材料の交配・育成をしています。また、室内では各自の研究テーマにそって、DNA抽出、酵素処理、電気泳動、組織培養などの実験を行っています。このような雰囲気の中で、研究室のスタッフは学生の教育および研究の一層の向上を目指しております。しかし、まだまだ未熟なところもあります。今後ともますますのご支援・ご指導を賜りますようお願い申し上げます。



応能を明らかにするため細胞情報伝達の機能解析を行っています。一般に、植物は動物と違って移動できないので、たえず外界の環境変化に曝されることとなります。そのため植物は、刻々と変化する様々な環境ストレスに対して適応能を獲得してきました。この能力は主として細胞情報伝達能の獲得とその多様化に依拠していると言えます。その中でも特に、タンパク質のリン酸化による情報伝達に着目し、それらが形成する情報伝達のカスケードの組み合わせを明らかにすることによって植物のストレス耐性のメカニズムを解き明かし、ひいては、低温や乾燥、高塩などに耐性のある植物の作成に応用することを目指しております。

私は、熱帯の特殊なイネである浮稲を材料に研究しています。このイネは、熱帯の大河流域の洪水地帯で栽培され、洪水による水位上昇につれて節間が伸長し水没することなく、洪水条件でも成長を続けることができます。この浮稲の深水下での旺盛な成長

能力に着目し、その反応を誘導する環境変化のシグナル因子の同定と、そのシグナルに対する植物側での感受・伝達・反応のメカニズムを解明することで、浮稲の改良および植物成長の基礎研究に貢献できればと考えています。また浮稲は、洪水の水が引くと地面に倒れ、重力屈性により茎の先端と穂が起き上がりやす。この茎の重力屈性は収量に大きな影響を及ぼす重要な生理反応であり、この反応機構も研究対象としています。

今年度から国立大学は独法化され、それに伴い神戸大学では予算が削られ、教員定員も削減され、研究・教育以外の仕事が増えました。また大学に競争の原理を導入して、生き残りをかけて努力することが金科玉条のように言われています。このような環境のもとでも、己を見失うことなく、着実な研究と教育を行う魅力ある研究室でありたいと思っております。どうか同窓会の皆さんのより一層のご支援・ご鞭撻をよろしくお願いたします。



熱帯植物学研究分野は、旧栽培学研究室を母体として1973年に熱帯有用植物学研究室として誕生しました。当初は園芸農学科に属していましたが、1993年の学部改組による大講座制の導入により、生物環境制御学科植物機能制御学大講座に属することになり、現在の熱帯植物学研究分野に名称を変更しました。設立から現在までの31年間に、170名の学部卒業生、67名の修士課程修了者、10名の博士課程修了者を送り出しています。卒業後、企業や国の研究機関で行った研究での学位取得者を含めると、熱帯植物学研究室は17名の博士取得者を社会に輩出したこととなります。

設立当初のスタッフは、佐藤孝先生（名誉教授）と山口禎先生（名誉教授）の2名で、1980年に安田武司先生、1981年に内田直次先生（現資源植物学講座教授）が加わり、1991年に私が加わりました。1998年に内田直次先生が植物資源学科に移られ、そして生物機能制御学科から南森隆司先生（神C6回）を迎え入れて、現在、安田武司教授と南森隆司教授（遺伝子実験センター）、助教の東哲司（大学院自然科学研究科）の3人のスタッフで運営しています。現在学生は、大学院博士後期課程1名、大学院博士前期課程（修士課程）5名、学部4年生6名、学部3年生5名、研究生2名の合わせて19名が在籍しています。また特別研究員1名を抱えています。

私どもの研究分野では設立以来、熱帯のイネやマメ類、コーヒー、サトウキビ、キャッサバ、サゴヤシ、カカオ、ステビア、ロゼル、アカシア、マンギウム、エリオットマツ、マングロープ等の熱帯植物を材料に研究を進めてまいりました。これまで、これらの植物の栽培方法や形態などの研究から、物質生産や光合成能力の調査、組織培養による大量増殖と再分化機構の解明、熱帯環境への適応メカニズムの解明等の研究を進めてまいりました。以下に、現スタッフの研究テーマについて述べさせていただきます。

安田武司教授は、コーヒー

属植物のアラビカ種およびカネフオラ種の組織培養による体細胞胚形成法やプロトプラストからの再生法を開発することに、コーヒー属植物の培養システム化を図っています。またインディカ種のイネの再分化に有効な手法を築き、生理学・生化学・分子生物学的手法を用いて研究を進めてきました。さらに、砂漠に自生するアトリブレックス属の塩生植物の耐塩性遺伝子を解析し、耐塩生作物の作出を目指しています。最近では、循環型環境保全農業に興味を持っておられます。

南森教授は、植物の環境適

**動物資源利用化学教育研究分野**

教授 岡山 高秀

当研究分野の発足から今日までを簡単に紹介します。昭和27年（1952）4月、「兵庫県立農科大学」から「兵庫県立兵庫農科大学」への改称時に、畜産学6講座の一つ「畜産第三講座（利用）」として発足しました。当時、本講座は、特に皮革製造研究のために設置されておりま

す。その後、昭和41年（1966）4月、国立移管時に畜産学「畜産製造学」となりました。さらに、平成5年（1993）4月学部改組により、当研究分野は畜産学から、農芸化学を母体とする生物機能化学科に移り「動物資源利用化学」となり、現在に至っております。その間、



初代教授沢山 智先生から近藤健次郎先生、伊藤和彦先生、西川 勲先生と引き継がれてきました。西川先生は相模原のご自宅で悠々自適のご生活をお楽しみです。初代から3代目までは既に他界されております。私は、近藤・伊藤・西川先生と3人の教授に仕え、何かといひ勉強をさせて頂きました。今では「古き良き時代の想い出」のようでもございます。

次に、現在の当分野の担当教員をご紹介します。教員は、昭和49年（1974）4月赴任の岡山、昭和62年（1987）4月赴任の山之上 稔助教授、平成11年（1999）3月に九州大学大学院農学研

究科農芸化学（生物化学）より着任の岩水史朗助手の3名から構成されています。それぞれの研究テーマは、以下のとおりです。岡山は、食肉製品の発色機構関係を基礎として、パルマハムから見出された新規発色色素（Znm）の発現機構の解明、神戸ビーフの食べ頃の指標検索、食肉の色調保持に関する研究などに従事しています。山之上は、食肉の科学で重要な課題の一つである食肉の軟化機構の解明を目的として、筋原線維タンパク質パラトロポミオシンの筋節A-I接合部における局在の分子的背景および高カルシウム濃度による遊離機構の解明、さらに熟成に伴う

資金を調達し実験を進め、教育面では学生さんに対する研究指導・教育を通して幅広い専門知識と技術を備えた人材を育成し、神戸大学農学部ブランドとして社会に貢献できる人材を送り出さねばなりません。それには、現職教員の努力はもちろん、卒業生各位のバックアップをおおいに必要とし、就職関係、共同研究などこれまで以上の密接な関係の構築を願っております。我々は、神戸大学農学部「動物資源利用化学」有りとなり、各自の得意とする能力を十分に発揮し、その存在を大いにアピールしていかなければなりません。

土地環境学研究分野は、3代前に学部長を歴任された尾崎敬司名誉教授が創設された旧農工学土地利用工学研究室に端を発します。その後数回の改組を経て、平成6年3月に尾崎敬司先生が退官された後、現在の内田一徳教授に引き継がれています。その後、平成12年12月に私が着任し、現在、内田一徳教授とともに2名の体制で研究室運営を行っております。

私は17年間民間会社に勤

食肉タンパク質変化の網羅的解析などで着々と成果を挙げています。岩水は、大型プロジェクトに参画し、吸血性ダニ由来新規生理活性物質に関する研究に精力的に取り組み、当分野の活性化の牽引役を担っております。

当分野の専攻生を紹介し、ます。現在、所属の学生さんは博士課程後期課程1名、前期課程（修士課程）2年生2名、同1年生5名、学部4年生6名、それに中国からの留学生（山之上助教が指導教員）2名の計16名です。それぞれの研究テーマに真摯に取り組んでいます。就職・進学関係もお知らせします。上記、在学生の修士2名は、第一化学薬品（株）、倉敷紡績（株）、学部4年生は奥本製粉（株）、第一化学薬品（株）に就職が決定し、残り3名は修士課程に進学予定です。最近卒業した修士卒は万有製菓（株）、N.T.T.西日本、辰馬本家酒造（株）、メロディアン（株）、OCI（株）、「旧大阪化学合金（株）」、万有製菓（株）、森永製菓（株）、学部卒は、（株）クラヤ三省堂、フジッコ（株）、地方公務員、山洋化成工業（株）、ノボルデイスクファーマ（株）、日本たばこ産業（株）、エム・シー食品（株）、（株）ジャステック、カゴメ（株）、（株）ノエビアなどで活躍しています。

皆様ご存知のように、本年4月から、国立大学神戸大学は、国立大学法人神戸大学となり、法人化に伴い大学の運営、教育、研究その他諸々のことを、神戸大学独自で遂行することになりました。研究面では、各自で

拳動に関する研究を遂行してまいりました。着任後も実務経験を活かし、内田教授と一枚岩となつて、教育研究に傾注できればと考えている次第です。

現在の研究室は、ホームページに公開しているとおり、基本運営方針として下記の5項目（HPより抜粋）を掲げて、教育研究を行っております。（最後に示してあるURLをご参照下さい。）

- ・ 土地環境学研究室では、農地や農村のきれいで安全な環境づくりを目指しています。
- ・ この目的を達成するために、ため池やパイプラインを含む水路・農地・農道などの施設構造物の合理的な設計施工、災害防止の方法や手段を研究しています。
- ・ 用いるべき研究手法としては、現場条件に合った模型実験あるいは現場実験と数値解析の双方を基本としています。
- ・ 研究課題の設定や問題意識の高揚を主目的として、現場見学旅行・研究体験実習を年数回開催しています。
- ・ また、本研究室内では、学生と教官が、お互いを研究者および人間として、尊敬し、信頼し、協力しあえる研究教育体制を確立したいと考えています。

現在進展中の具体的研究テーマであります。地盤工学的見地から上記の方針に従って、数多くの研究テーマを遂行しています。近年では水質浄化に関する研究なども加

### 食料生産環境工学科地域環境工学講座 土地環境学研究分野

助教授 河端 俊典



**平成17年度版六條会名簿発刊決定**

●名簿1冊 **4,000円** (送料込)

- 平成17年10月発行予定です。
- 往復葉書により調査開始しています。
- 葉書未返信の方には、電話で確認します。

お問い合わせ先 **0120-800-756**  
**(株)両備システムソリューションズ 六條会名簿係**  
(六條会では、名簿作成業務を当企業に委託しています。)

平成15年度 庶務報告

平成16年5月8日(土)に代議員総会が参加者32名、委任状8名で開催されました。その中で、役員変更の申し出があり、会則に基づき審議した結果、副会長 置塩康之氏の後任として吉川年彦氏が、理事(副代表理事・名簿) 松本幹夫氏の後任として武 正興氏が選出されました。任期は、平成16年までです。

役員

- 会長: 北浦 義久(兵A6)
副会長: 久下 平(兵C1)
副会長: 能宗 康夫(兵C2)
副会長: 杉本 金五(兵Z5)
副会長: 吉川 年彦(兵C15)
副会長: 西尾 司(兵Z16)
理事(代表理事): 中村 直彦(神Z1)
理事(副代表理事): 武 正興(神C3)
理事(庶務): 水野 雅史(神C15)
理事(会計): 原山 洋(神Z18)
理事(会報): 相野 公孝(神P12)
理事(会報/名簿): 若田 均(神C14)
理事(会報): 岡野 光世(神A22)
理事(名簿): 武 正興(神C3)
理事(名簿): 菅原 通直(神C4)
理事(学生会): 西川 欣一(兵A1)
理事(学生会): 王子 善清(兵C12)
理事(KUC): 能宗 康夫(兵C2)
理事(KUC): 石賀 暢一(神C1)

- 中村 直彦(神Z1)
中田 昌伸(兵C10)
外山 真理(神C9)
東 順三(兵C1)
田中 平義(兵C1)
西川 欣一(兵A1)
新家 龍(兵C5)
松浦 良彦(兵A1)
久保 一兵(兵C2)
藤中 勤(兵Z4)
中澤 啓一(兵A7)
津田 安啓(兵C8)
小田垣博三(兵A9)
酒井 修(兵A9)
櫻井誠次郎(兵Z10)
坂井 永利(兵A12)
永吉 照人(兵A13)
池田 吉一(兵A13)
松井 功(兵T16)
塩田悠賀理(兵P17)
得丸 哲士(神Z2)
天野 孝司(神Z7)
矢代 学(神P10)
東 哲司(神A17)
門岡 織江(神P17)
向井 信之(神T18)
谷河 賞彦(神P21)
阿部 永子(神Z21)
宇野 雄一(博後H8)
鈴木 武志(神C23)
丸橋 康弘(神P23)
竹中 慎治(神C24)
田中 学(神T27)
阪上 昭宏(鶴3)

平成15年度の一般事業として入学者記念品贈呈、会費納入促進、会報発行、各支部活動、学友会・KUC援助、農学部および農場活動援助、六甲祭援助、退官教官記念品贈呈、卒業証書簡及び手提袋贈呈、卒業祝賀会援助、慶弔関連などを行いました。また、会員の海外渡航援助

として、5名(渡航先:アメリカ3名、イタリア2名)に、農学部の学術講演会援助として、生産環境工学科主催の学術講演5件に対して、援助を行いました。また、今年度は、12月1日、2日に農学部主催で開催された国際シンポジウム Asian International Symposium on Agricultureに援助を行いました。

平成16年度の活動については、神戸大学大学院学生海外派遣援助事業が設立されたため、今年度は海外渡航援助を一時休止することにした以外は、例年同様、一般および学術振興事業活動を維持していくことが総会で承認されましたので、それに基づき現在活動を開始しているところであります。

慶弔記録

以下の方々がご逝去なされました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(敬称略)

- 坂田 辰夫(神C22回)
竹崎 通善(旧教官)
村田 照(兵A1回)
横田 耕一(兵C1回)
松下 俊夫(旧教官)
佐藤(谷田)嘉久男(兵C4回)
河南 保幸(動物機能調節学)
津川 兵衛(資源植物学)
高橋 信正(食料環境経済学)
大塚 絳雄(生物環境学)
大川 秀郎(生物制御学)
山本 博昭(生物生産工学)
河野 和男(付属農場)

着任された教官

- 山内 靖雄(生物機能化学科)
阿江 教治(生物環境制御学科)
星 信彦(応用動物学科)
吉田 健一(生物機能化学科)

六條会 平成15年度一般会計決算報告書

Table with 2 columns: 収入, 支出. Total revenue: 6,791,508円, Total expense: 5,105,547円. Balance: 1,685,961円.

Table with 5 columns: 項目, 予算額(円), 決算額(円), 増減(-;減), 備考. Summary of revenue items.

Table with 5 columns: 項目, 予算額(円), 決算額(円), 増減(-;減), 備考. Summary of expense items.

六條会 平成15年度六條会基金決算報告書

Table with 2 columns: 収入, 支出. Total revenue: 32,826,228円, Total expense: 540,000円. Balance: 32,286,228円.

Table with 5 columns: 項目, 予算額(円), 決算額(円), 増減(-;減), 備考. Summary of revenue items.

Table with 5 columns: 項目, 予算額(円), 決算額(円), 増減(-;減), 備考. Summary of expense items.

六條会 平成16年度一般会計予算

Table with 5 columns: 項目, 15年度予算額(円), 16年度予算額(円), 増減(-;減), 備考. Summary of revenue items.

Table with 5 columns: 項目, 15年度予算額(円), 16年度予算額(円), 増減(-;減), 備考. Summary of expense items.

平成16年度六條会基金予算

Table with 5 columns: 項目, 15年度予算額(円), 16年度予算額(円), 増減(-;減), 備考. Summary of revenue items.

Table with 5 columns: 項目, 15年度予算額(円), 16年度予算額(円), 増減(-;減), 備考. Summary of expense items.

FAX 078-881-2752
e-mail rikusou@ans.kobe-u.ac.jp
ホームページ http://home.kobe-u.com/rikusou/

編集後記

六條会会員の皆様、ご活躍のこととお喜び申し上げます。皆様方のお陰をもちまして、今年も何とか無事に会報を発行することができました。会報作成を手がけるようになり、いろいろな分野で同窓生の皆さんが活躍されていることを、再確認することができました。また、原稿を依頼させて頂いたときには、快くお引き受け頂き、心より感謝しております。

表紙の写真は、篠山城跡から眺めた風景です。先輩の一人と一緒に撮った写真があり、そのときに撮った写真です。「兵庫農科大学の学生の頃は、酒を飲んでよくこの風景を眺めた。」と懐かしそうに、見ておられました。会員の皆様には、いろいろな感慨をお持ちになられながら写真を見ていただけるものと掲載させて頂きました。勿論、六甲台卒業生には新しい風景として見て頂ければ幸いです。

第19号から、「最新研究情報」を掲載することになりました。神戸大学におきましては、すばらしい成果が続々と報告されています。その一部ではございますが、最新の成果を紹介したいと思ひ企画いたしました。今後、さらに充実させていきたいと考えております。また、「こんなことをもって載せてほしい!」「この企画はおもしろくないからやめろ!」など、ご意見がございましたら、会報担当理事までお申し付けください。今後とも、会員の皆様方と一緒に、六條会会報を編集していきたいと考えております。

2005年が良い年でありませう、また、皆様のご健康、ご多幸とご活躍を祈念いたします。(会報担当理事一同)